

拝啓 今年も早や10月下旬となりました。いつもエンカウンターをお読み頂きありがとうございます。近所の公園では、きんもくせいの花が、甘い香りを漂わせながら咲いています。

今回は、小西芳之助先生の『エペソ人への手紙講解説教』からの引用の第5回目です。今回のエンカウンターの5頁「イエス・キリストにあつて エン・クリストウ」には、次のように書かれています。

「「イエス・キリストにあつて」というのは、イエス・キリストの贖いを信じていることを、「イエス・キリストにあつて」と言う。パウロのこれは一枚看板、「エン・クリストウ」、「キリストにあつて」というのはパウロがいつも言う言葉である。「イエス・キリストにあつて」というのはどういうことかいうと、イエス・キリストの贖いを信じるということなんです。

それで次。「イエス・キリストの贖いを信じて、イエス・キリストの血によって」、またこれパウロは贖いを説明している。イエス・キリストの血、十字架の贖いを出しているのです。「イエス・キリストの血によって近いものとなった」というのは、神に近いものになった。神に近いものになる。すなわち、永遠の命を頂くというのは、ひとえにイエス・キリストの贖いによる。これを福音という。キリスト教の福音というのは、イエス・キリストの贖いです。自分の信仰、自分の行ない、自分の心の状態とか行いの状態とか、人格とかそういうものによらない。ひとえに、イエス・キリストの十字架の贖いによって、われわれは神の言葉に従い、永遠の命を頂く、これを福音という。」

エペソ書に十字架の贖いのごとが、こんなに説明されているとは、これまで気が付きませんでした。と言うより、この1年、十字架の贖いの信仰が、多少理解できるようになったので、小西先生の説明が理解できるようになったということかもしれません。

この一月に読んだ『一日一生』等の本から、感銘を受けた言葉を紹介します。

小西芳之助先生『主の御名を呼ぶ』10月14日

「平凡なこと

有名な英語の先生であった神田乃武先生はこう言われた。「平凡なことをなさんと試みるなかれ。平凡なことを非凡に素晴らしくなさんと試みよ」と。

私は、中学時代にこれを暗記した。しかし、どうしても忘れることは出来なかった。歳をとればとる程、この文句が好きになる。

私達は、偉大なことにして、非平凡なことをなしたいと思う。しかし、平凡なことを素晴らしくなさんと努力することなしには、偉大なことをなすことは出来ない。そのわけは、平凡なことを素晴らしくなさんとすることによってのみ、偉大なことをなす力が与えられるからである。」

新渡戸稲造先生『一日一言』9月25日

「事の成る成らぬは天に任し、自分はひとえにその日その日の務めを全うすれば足る。その結果が思う通り行かずとも、これ必ずしも失敗でない。植うる種子は1月で生ゆるもあり、百年後に芽ぐすもある。人生は限りなきの播種なり。発芽も収穫も天意にあり。」

松下幸之助先生『道をひらく』『日々是新』

「きのうはきのう、きょうはきょう。きのうの苦勞をきょうまで持ち越すことはない。「一日の苦勞は一日にて足れり」というように、きょうはまたきょうの運命がひらける。きのうの分まで背負ってはられない。毎日が新しく、毎日が門出である。

日々是新たなれば、すなわち日々是好日。素直で謙虚で、しかも創意に富む人は、毎日が明るく、毎日が元気。

さあ、みんな元気で、新しい日々を迎えよう。」

内村鑑三先生『続一日一生』10月20日

「自己の弱きのみを悲しみ、自己の不足をのみ、かこち、自己の痛みのみを感じて、ただひとえに人に慰められんと欲し、助けられんと欲し、導かれんと欲する者は、いつまで待つも、慰められず、助けられず、導かれないのである。慰められんとお欲するか、自ら進んで、自己よりも不幸なる人を慰めよ。助けられんと欲するか、自己よりも弱き人を助けよ。教えられんと欲するか、自己よりも愚かなる者を教えよ。まず与うるにあらざれば得るあたわず。人を量るその量器をもって量らるべし。」

パークレー先生『ウイリアム・パークレイの一日一章』(10月13日)

「独自の特徴をもつ主な年令が3つあると言う。

第1の年齢は青年時代にその絶頂に到達するもので、体力とか走行速度とか言った肉体的な面で大きな進歩が見られる。第2は中年において達するもので、成熟と自信がその特徴であり、成功するものはその時まででにその職業や経歴において最高の業績を達成する。第3は、老年にいたって達するもので、経験とか体系的思考とかいった精神的なものがその中心の特徴であり、ついに人生の英知に到達するようになる。」

いつまでも若くあろうとするのは誤りである。

青春は素晴らしい時代だ——それは永続するものではない。われわれはこの事実を受け入れなければならない。

老年にも問題はある。老人は自己中心にならぬよう、また偏くつにならぬよう、注意しなければならない。「自己の意見をもつのはいいが、そのためにいちいち人と衝突するのでは困る。」

レター・B・カウマン先生 『荒野の泉』10月7日

「あなたは、靈的に霧の深い川岸を進む時、突進してはならない。小舟を進める速度をおそくし、必要ならばあなたの小舟のいかりをおろしなさい。さもなければ、いかりをおろす位置に止まりなさい。ただ単純に神に信頼しなさい。」

早稲田教会のオレオス会（9月14日）で、月本先生から教わった十字架の贖いの私の受け取りについて、説明しました。10月2日のYMCAの同窓会でも、その話しに加えて、石館守三先生の黙示録講義で聞いた話を加えて、新しい「十字架の贖いについて」のメモを作り説明しました。

10月19日、東大ホームカミングデーの企画として、南原繁セミナーを開催し、私が「南原繁の宗教観」という題で、30分話しました。対面で40名ぐらい、ズームで30名ほどの人が申し込んでくれましたが、対面参加者のうち10人ぐらいが私の友人で感謝しました。ズームの方には、Wi-Fiの容量が切れて、インターネットが途中で切れてしまい、ご迷惑をおかけしました。

新型コロナについては、病院やクリニックではマスクをつけるように指導されていますが、電車の中とかスーパーでも、マスクをしない人の方が多くなりましたが、外出された後の手洗い、うがいなどは、実行されて、十分ご注意ください、コロナやインフルエンザにかからないように注意されるよう、祈り申し上げます。

2024年10月21日

山口周三

エンカウンターの読者各位